

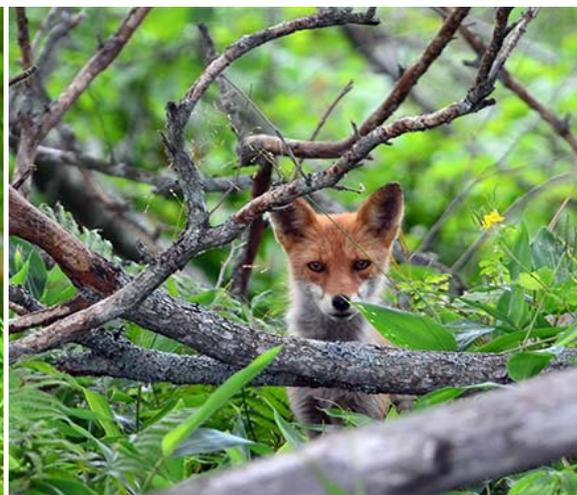
# 月刊 やちまなこ

2016.7.15 発行

No. 224

## 7 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



### 湿原散歩

朝から濃い霧に覆われた湿原の気温は11℃。ポト、ポトと水滴が花から落ちて葉を揺らす。今年の夏は天候不順で晴れた日は数えるほどしかなく、牧草の刈り取りも遅れているようだ。鉛色の雲の下、晴れ間を諦め、熱いコーヒーが飲みたい欲望に負けて帰る姿をキタキツネがじっと見ている。

## コッタロ川と湿原のほとりから

### 193 7月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

“七夕や雲間隠れに天の川”をチラリと排した今季、ヒラリと風にひるがえる短冊を眺め乍ら、本番の8月には“星月の輝く空に天の川”となりますよう、祈ることに致しましょう。

さて、6月13日から延々と小止みなく続いた霧雨混りの長いトンネルを抜け出したのは27日でした。この日を皮切りにそれ迄ひかえ目にしていた彼等が、せきを切った様に鳴き出し、“北の梅雨明けて波打つ蝉時雨”。又、同様に満を持しての草刈り作業が一斉にスタートし、夜明け前から酪農家による大型機械のごう音で目がさめ、“明け易し農機の唸り出す草地”。ところが、それも束の間、7月に入ると『一日晴れて7日雨』の肌寒さ。低温と日照不足に見舞われて、葉物野菜は早くも花盛り。種をまき直さねばなりませんまい。

一方、山の緑が日増に濃く深くなる中、大きくせり出した様に見える山懐からきこえてくるアオバトの“*オ～ア～オ～ア*”のリズミカルな連続音や、エゾセンニュウのユーモラスな“*チョチョッピリハゲタカ???*”の囀りに抱腹絶倒の毎日。これだから思わず知らず戸外へと足が向いてしまうのでしょうかね。期間限定の彼等からの嬉しい贈り物には感謝あるのみです。

ところで、今年このエリアでの丹頂4家族にヒナが一羽も誕生しなかったのは初めてで、湿原の営巣場所の超過密化によるナワバリ争い激化がけ念される近年ですが、静かに見守る他ありません。それでもコッタロには夏鳥達が多く子育て中で、各々の種類が幼鳥を連れエサ捕りに夢中のところ、羽ばたきの美しさに魅せられてパチリ！中でも珍しいのは入内雀♂の明るい茶色が目立つ飛翔と百舌の尾羽の意外な長さ。今まさに飛び立つ瞬間のツツドリの構えと緊張感や、池のクレソンをたらふく食んでいて人の足音にあわてて重量のある体を空中へと飛び上がらせるのにやっと、と云った鴨君等涼し気な瞳で笑っているように見えるところが面白いでしょう？“夏鳥や思い思いの飛翔哉”。



## 湿原の住人たち その184

### チシマアザミ

チシマアザミはあるこっと周辺の散策路沿いでも見られる高さ1～2mほどになる大型の多年草です。葉の形や大きさは、全縁のあるものから切れ込みのあるものまで変化に富んでいます。葉の縁には刺がありますが、若葉は食用に利用されます。6～8月の花期には紫色の花が下を向いて咲くので、他のアザミの仲間と区別しやすいです。花の見頃には、蜜や花粉を求めてやってくるハナバチやハナアブ、チョウなど多くの昆虫が見られます。



## 縄文土器作りを体験しました

自然ふれあい行事「縄文土器作り講座」(標茶町郷土館共済)を9日に開催しました。当日は標茶町郷土館学芸員の坪岡始さんを講師に、塘路地区周辺から出土した土器や黒曜石の矢じりなどを参加者に見せて触れてもらい、当時の生活や釧路湿原の環境について説明してもらったあとに土器作りを始めました。粘土をひも状にしたものを輪積みする時には、空気を閉じ込めないよう隙間なく仕上げることで、焼いた際に空気が膨張して破裂を防ぐことを教えてもらいました。午後から模様付けの作業となり、様々な大きさの紐を土器の表面を転がすと独特な縄文が現れ、参加者も驚いていました。ほかに貝殻や木の枝などを使って仕上げた土器は自然乾燥させたあと、8月に野焼きをして完成させます。さあ、どんな土器に仕上がるか?ワクワクドキドキです。



## つぼちの塘路湖周辺うろうろ日記 Vol.90「朝露の輝く道」

現在の塘路はエゾハルゼミの時期が終わり、コエゾゼミが出現するまでの端境期で、静かな湖畔に鳥の囀りが響き渡る落ち着いた時期です。フィトンチッドの森を歩くと、静寂の中、苔むした道についた朝露が日光で反射され、幻想的な雰囲気を出していました。

フィトンチッドの森は誕生から今年で20周年を迎えました。この森は元々標茶町郷土館に隣接するオーベルジュピルカトウロの整備の中で計画され、標茶町役場によって作られました。当初の計画ではこの遊歩道の他にも、サイクリングロードを作る事なども計画に上がりましたが諸所の事情で断念しています。今にしてみるとサイクリングロードがあれば元村地域も、更に利用しやすくなっていたと思うので残念です。なお“フィトンチッドの森”の名称は一般公募ではなく、役場担当課が呼んでいた愛称でした。

私が来てから15年近くフィトンチッドの森を歩いています。年々人口で作られた遊歩道に草木や樹林が侵食し、独特の調和が生まれつつあります。いつか世界遺産熊野古道のような情緒ある風景が生まれればよいと願っています。

坪岡 始 (標茶町郷土館学芸員)



